

## 平和の使いとして コロサイ 2:19-23

2023. 8. 6、丘の上 NO. 705  
春日部福音自由教会 山田豊

本日8月6日は、広島に原爆が投下された記念日、9日は長崎に原爆が投下された日です。以前会津若松市の若松栄教会を訪れた時、礼拝堂に「焼き場に立つ少年」他、ジョー・オグネル氏の作品が並べられているのに驚きました。オグネル氏の奥様がこの教会の会員ということで、毎年8月は平和学習を行い、平和のための礼拝をささげておられるのでした。この志は、私たちの教会も同じですね。

年のころ10歳と思われるこの写真の少年は、自分の母親が、あるいは人が焼かれている様をじっと見ていたことでしょう。コロサイ人への手紙は、パウロがイエスキリストの十字架の死を心の中でじっと見つめて、聖霊の促しの中で書かれたものだと思います。本書の中心は、イエスキリストの十字架の死であり、このことのゆえに人は罪を赦され、神と和解し、神との平和を持つことができるようになったのです。しかもこの和解と平和は、人間に対してだけでなく、神に造られたすべての被造物に及ぶと、パウロは言うのです。20節には、「その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」とあります。確かに、神がこの世界を造られたとき、被造物、私たちが自然と呼ぶ世界は、とても良かったのです。調和がありました。しかし、自分の欲望のままに自然をコントロールしようとしたのが、人間です。その結果、地球全体が呻いています。私たち人間の生活が、いろいろな分野で脅かされているのです。10年に一度の暑さ、死の危険がある暑さ、とされています。このままほおっておけば、毎年死に至る暑さを経験するようになるのです。今こそ、人は神の前に自分たちは造られたものであることを自覚し、造ってくださった方に従うべきなのです。自然の秩序に従う生活に、戻らなくてはならないのではないのでしょうか。すなわち、悔い改めです。

パウロは、福音は和解と平和の福音であると理解し、この福音が示すライフスタイルの実践を、私たちにも説いているのです。それは、一人一人が平和のための道具になるところから始まります。平和の使いとして、自分自身をささげることです。死に瀕する人に最後まで寄り添ったマザーテレサは、アッシジのフランシスコのその言葉に惹かれ、平和を作る者となったのでした。イエスキリストの十字架の死は、平和の使いとしての最も大きなあかしだったのです。

引用聖句

ローマ 8:19-22 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

ローマ 5:1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。